

新しい発達診断法開発の試み（その2）

企 画：	荒木穂積	（立命館大学産業社会学部）
司 会：	竹内謙彰	（立命館大学産業社会学部）
ファシリテーター：	中村隆一	（立命館大学大学院応用人間科学研究科）
話題提供1：	富井奈菜実	（立命館大学大学院社会学研究科）
話題提供2：	松元佑	（立命館大学大学院社会学研究科）
話題提供3：	松島明日香	（奈良教育大学教育学部）
指定討論：	服部 敬子	（京都府立大学公共政策学部）
	平沼 博将	（大阪電気通信大学工学部人間科学研究センター）

【企画主旨】

われわれは、保育、教育、特別支援教育を念頭に、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」（田中昌人）を背景とする新しい発達診断法の開発に取り組んでいる。現在、予備研究(pilot study)の段階で、幼児版1から4の試案の作成を終え、日本とベトナムでデータの収集と分析を開始している。昨年の第25回大会（2014年3月：京都大学）では、本試案の特色である「ヒント」や「支え」の意味を発達診断法の視点から検討し、話題提供した。今回は、日本とベトナムとのデータの比較分析を試み、文化差・地域差をこえて発達の基本構造の検出が可能かどうかを検討する。また、配置した観察項目（下位項目）の年齢別資料を提示し、下位項目および評価基準の妥当性を検討する。あわせて文化間・地域間の共通点と相違点を検討する。発達診断法の開発に関係しておられる関係者のみなさん、保育、教育、特別支援教育の現場で教育指導関わっておられるみなさんからご意見をいただき討論を深めたい。

【話題提供1】 発達のチェックリスト幼児版1・2の観察項目の妥当性の検討と日越比較（松元佑）

日本とベトナムにおいて、1歳前半から6歳前半までの子ども達を対象に発達のチェックリストを実施した。ここでは、両国で得られた発達のチェックリスト幼児版1（1歳6ヶ月頃の発達をみる）および2（2, 3歳頃の発達をみる）のデータの分析をして、評価基準の妥当性の検討、日本とベトナムとの比較分析を試みる。具体的には、各チェックリストの姿勢・運動、微細運動、認識、言語・社会性の4領域の8項目の分析をおこない、文化間・地域間の共通点や相違点、相違点が生じた場合の背景を検討する。また、文化差を考慮して変更したベトナム独自の項目と日本の項目との比較もおこなう。

【話題提供2】 発達のチェックリスト幼児版3・4の観察項目の妥当性の検討と日越比較（富井奈菜実）

[話題提供1]につづき、ここでは、日本とベトナムで得られた発達のチェックリスト幼児版3（4歳頃の発達の力をみる）および4（5, 6歳頃の発達の力をみる）のデータの分析をして、評価基準の妥当性の検討、日本とベトナムとの比較分析を試みる。話題提供1と同様に各チェックリストの分析をおこない、文化間・地域間の共通点や相違点などの検討と日越間の比較、ベトナム独自の項目と日本の項目との比較もおこなう。

【話題提供3】 発達の基本構造に関する日越比較：項目間の共変動に着目して（松島明日香）

発達診断法の開発を進めていく上で、得られた子どもの反応が普遍的なものであるのか、文化・地域固有のものであるのかを検討することが重要である。ここでは、多重応答分析を用いて発達診断に用いる各項目間の固有値から布置図を作成し、各項目間の共変動を分析する。多重応答分析は布置図に配置された変数間の距離によって項目間の等質性を見出すことができるため、発達の基本構造を検出できることが期待される。日本とベトナムの布置図を比較することによって見出される変数間の距離や順序性に文化差や地域差が存在するのか、また、文化差や地域差を越えて共通する発達の基本構造を検出できるか検討をおこなう。

【付記】本研究は、JICA 草の根技術協力事業「知的障害児の就学率向上につながる教育プログラム開発とその普及を支援するプロジェクト」（プロジェクトマネージャー：荒木穂積）（2008年8月～2013年8月）、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究』（伴走的支援チーム）（2013年4月より現在）、立命館大学産業社会学会共同研究助成（2013年6月より現在）、人間発達研究所研究助成（2003年4月より現在）の支援を受けてすすめられている。